

銅山川疎水と柳瀬ダム

愛媛県の宇摩平野は瀬戸内海式気候に属し、雨が少なく、昔から干ばつに悩まされてきました。この地域の人々が山向こうの銅山川から水を引くことを本格的に考えるようになったのは、安政2年(1855)のことでした。この年、宇摩地方が大干ばつに見舞われた際、三島などの庄屋が連名で法皇山脈をくり抜いて銅山川から水を引き入れることを代官所に嘆願したのでした。三島代官は分水の願いを取り上げ、具体的な方策にとりかかるよう命じましたが、幕末、明治維新という転機に遭遇し、分水計画は中止となりました。

明治以降も銅山川からの分水の計画はありましたが、資金や利害調整などが課題となり実現しませんでした。法皇山脈に分水トンネルを通すためには莫大な資金が必要でしたし、下流の徳島県側からは吉野川の流量が減り周辺地域に大きな影響があるとの理由で反対の声が上がったのでした。紆余曲折がありましたが、内務省が仲介することにより、ようやく昭和11年1月に愛媛県と徳島県の間でかんがい用水のみを分水する第一次分水協定が成立し、疎水工事が開始されました。昭和20年2月には軍事非常体制下で国策上の理由から発電も目的に加えられ、分水量を増した第二次分水協定が成立しましたが、工事は戦争により中止を余儀なくされました。

戦後、愛媛県は工事の再開を図りましたが、徳島県から第二次分水協定は戦時体制下の国策に沿ったものとの異論が出され、折衝の結果、昭和22年3月に第一次分水協定で決定した下流放水量を保持する条件で第三次分水協定が成立し、さらに建設省が打ち出した洪水調節の目的も加えられて、柳瀬ダムが四国で初めての多目的ダムとして建設されることになりました。柳瀬ダムは、昭和24年4月に愛媛県の委託を受けて建設省が建設に着手し、昭和26年3月の第四次分水協定の成立を経て、昭和29年3月に完成しました。その後、新宮ダム、富郷ダムの建設により銅山川からの水の安定的な供給が図られ、柳瀬ダムは他の2つのダムとともに日本一の紙のまち四国中央市の発展を支えています。

柳瀬ダムは昭和20年代当時の最先端の技術が結集されて完成しました。特筆すべきこととして、他に先駆けてダムコンクリートにAE剤(混和剤)を用いて作業性の改善や耐久性の向上を図ったことと、取水塔に多段階式5門の取水口を設け冷水層を避けて取水できるようにしたことがあげられます。さらに、銅山川疎水と柳瀬ダムの完成までには多くの人々の努力の積み重ねがあったこと、ダムの建設に伴い旧金砂村で145戸、旧富郷村で11戸の862人が立退いたこと、ダム建設工事で19歳から45歳の8人が殉職されたことも記さなければなりません。

＜参考文献：合田正良編「銅山川疎水史」1966年、愛媛県史編さん委員会編「愛媛県史近代下」1988年、国土交通省四国地方整備局吉野川ダム統合管理事務所・柳瀬ダム管理支所編「柳瀬ダム50周年記念誌」2004年など＞

